せん妄の新規診断技術の開発

国立がん研究センター東病院 精神腫瘍科
科長：小川　朝生

23-A-21

ビジョン

- 入院、在宅等においてせん妄の見落としを減らし、認知症の発症予防、身体機能低下の頻度を減らす。
- 通常の診療の中で、せん妄の診断を支援する検査機器がない。せん妄の診断には、脳波計による解析がゴールドスタンダードはなるが通常の診療場面では実施が困難である。

市場性

- 簡便にせん妄の診断を支援する検査機器は未開発である。
- せん妄は入院患者の約20-30%に出現する。入院以外にも外来や在宅、施設介護等どの診療場面でも存在する。
- 臨床では専門医の面接による診断に寄っている。せん妄の有無の判断を簡便に支援できる技術は担当医や看護師の負担軽減の点からニーズが高い。病院管理者側からも在院日数の短縮、医療安全に絡む事故を減らす、病棟スタッフの負担軽減、離職者を減らす観点からニーズがある。

新規性・優位性

新規性：　簡便にせん妄の有無を判断できる
優位性：　非侵襲、短時間で判断できる。脳波計のように安静・臥床を長時間保持する必要性がない

連携への関心

【連携に関心のある業種】
医療/検査（機関）・IT・エレクトロニクス/デジタル
機械/装置 ・医療/診断/分析（機器）
ベンチャーキャピタル

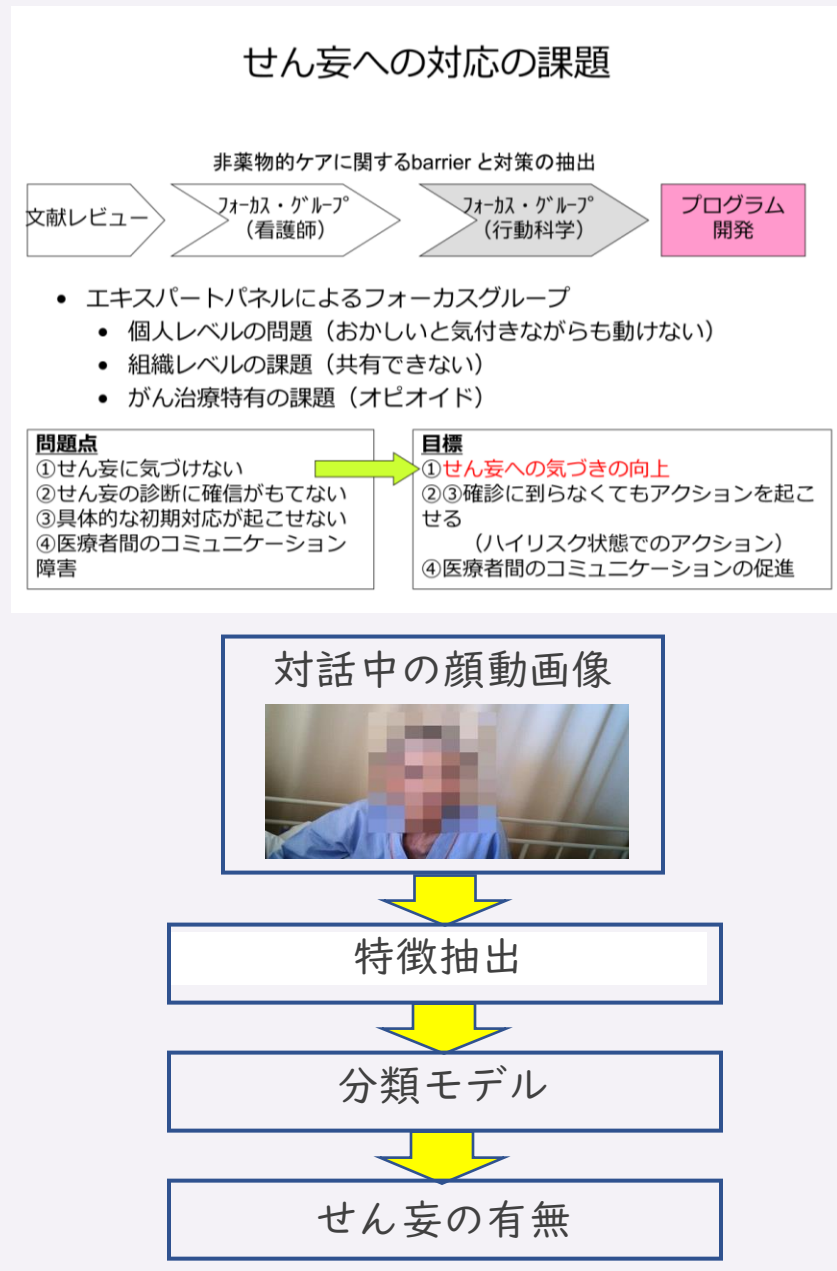
【連携に期待する事】
機器の製造、臨床試験の実施、スタートアップ支援など

研究概要

Key Words: #医療機器・器具， #AI

- せん妄とは
  せん妄は注意障害、睡眠覚醒リズムの障害を中核症状とし、
  種々の精神症状をともなう中枢神経系の機能障害の一形態である。
  せん妄は入院患者の約20%に出現し、
  治療中の事故（転倒・転落、ルートトラブル）や患者の意思決定を阻害する、
  家族の精神・身体的負担の要因になるなど、
  生命予後や治療成績、QOL、医療経済的負担の増加につながり、
  発症と重症化予防のための管理が必要である。

- 医療現場でのニーズ
  認知症の患者の6-8割がせん妄を併発すると考えられ、
  どの医療場面でもせん妄の診断と対応は大きな課題となっている。
  本提案により、適切にせん妄の判断が可能となることで、
  急性期医療を中心に、回復期リハビリ病棟、地域包括ケア病棟、
  在宅を含め、適切な治療機会を提供することにつながる。

- 市場規模
  一般病院において、在院日数が延長することにより病床回転率の低下、
  リハビリテーションの介入機会の低下、合併症治療による
  医療コストの上昇などにより、350億円程度の損失が
  発生していると見積もることができる。

技術の詳細については、CDA締結後に開示